

山形県埋蔵文化財調査報告書第22集

# 山辺条里遺構

発掘調査報告書

1979

山形県教育委員会

やま のべ じょう り い こう

# 山辺条里遺構

## 発掘調査報告書

昭和 54 年 3 月

# 序

本報告書は、昭和 51・52 年度に実施した、山辺条里遺構の調査成果をまとめたものであります。

県営大規模圃場整備事業等に係る 4 次の発掘調査によって、現在の水田下から条里制造構という、いわば古代の土地区画事業の跡が確認されました。

千年以上も前の水田の畦畔に残された足跡は、春先の畦踏みを思い起させ、洪水の惨禍による数度の水田の作り換えなど、先人の英知と力に改めて敬意を覚えるところであります。

本書が、全国でも稀な古代の条里遺構の報告書として、学術的に寄与されることを願うとともに、本県の稲作農業史の一頁として、県民の方々に御理解・活用いただければ幸いであります。

最後に発掘調査に御協力いただいた、山辺町教育委員会、県農林水産部、調査関係の多くの方々に、深甚の謝意を表します。

昭和 54 年 3 月

山形県教育委員会  
教育長 吉村敏夫

# 例　　言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が、昭和51・52年度に実施した、県営大規模圃場整備事業山辺南部地区及び山辺南部工業団地事業に係る、山辺条里遺構の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、山辺町・山形市教育委員会並びに関係諸機関の協力を得て、昭和51年7月（第1次調査）、昭和51年10月（第2次調査）、昭和52年6・7月（第3次調査）、昭和52年10月（第4次調査）の4次に亘って実施した。
- 3 調査体制は下記の通りである。

第1次調査	調査員 佐藤鎮雄・佐藤正俊（山形県教育庁文化課）
第2次調査	調査員 佐藤庄一・佐藤正俊・名和達朗（山形県教育庁文化課）
第3次調査	調査員 佐藤庄一・阿部明彦・手塚 孝（山形県教育庁文化課）
第4次調査	調査員 佐藤庄一・茨木光裕（山形県教育庁文化課） 横戸昭二（山形市教育委員会社会教育課）
- 4 遺構の挿図中記号は、水田—S J・畦畔—S N・水路及び溝—S D・取水及び排水口—E D・ピット—E Pとし、拓影図は3分の1、土器・木製品の実測図は3分の1を基本とし、下方にそれぞれスケールを示した。
- 5 本報告書の作成にあたって、文章の執筆及び挿図の作成は、山形県教育庁文化課の阿部明彦・茨木光裕・佐藤庄一、編集は、佐々木洋治・名和達朗・茨木光裕が担当した。

# 目 次

I	調査の経緯	
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	2
II	遺跡の環境	
1	地理的環境	3
2	歴史的環境	5
III	遺跡の概観	
1	畦畔の現状	6
2	遺跡の層序	8
IV	検出された遺構	
1	第1・2次調査	10
2	第3次調査	12
3	第4次調査	18
V	出土遺物	20
VI	まとめと考察	
1	調査の成果と問題点	25
2	山形盆地における奈良時代の土器について	29

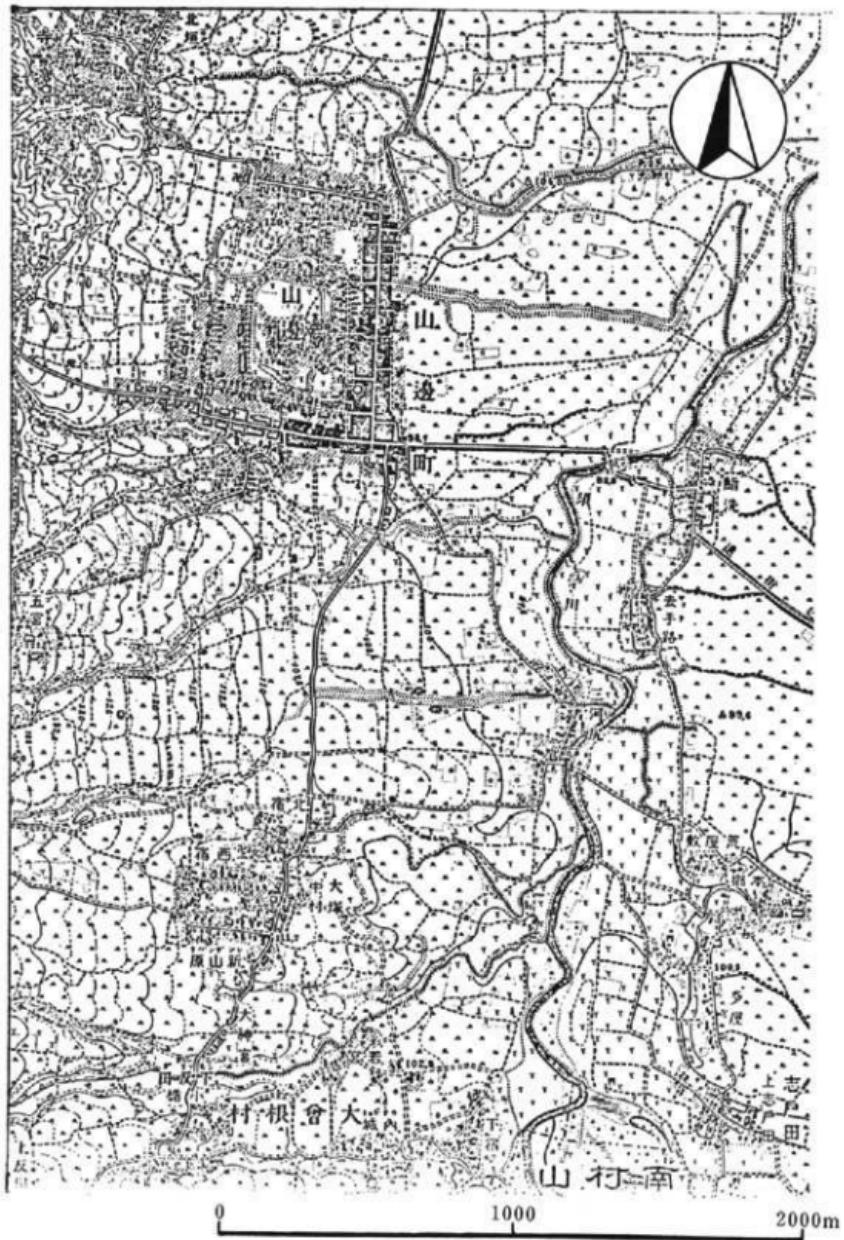
## 挿図目次

第1図	地形図 明治38年(1905年)陸地測量部発行	
第2図	全体図	4
第3図	調査区と現畦畔概況	7
第4図	土層図	9
第5図	1次・2次調査部分図	11
第6図	3次調査(現畦畔と検出畦畔)	13
第7図	3次調査畦畔遺構部分図(1)	15
第8図	3次調査畦畔遺構部分図(2)	17

第9図	4次調査畦畔遺構と現畦畔	19
第10図	遺物(1)	21
第11図	遺物(2)	23
第12図	推定条里跡	27

## 図版目次

- 図版1 山辺条里遺構全景
- 図版2 調査区遺景(2次) 発掘風景(2次)
- 図版3 Cトレント畦畔セクション(2次) Cトレント畦畔セクション(2次)  
Eトレント畦畔跡(2次)
- 図版4 発掘風景(3次) 検出畦畔(3次)
- 図版5 検出畦畔(SN26, 27, 28)(3次) 検出畦畔と水路(SN23)(3次)  
検出畦畔(SN24)(3次)水口検出状況(ED8)水口と畦畔(ED7)(3次)水路と  
水口(ED12)(3次)
- 図版6 土層セクション(3次) 畦畔と土層の堆積(3次) 畦畔セクション(3次)  
大溝跡セクション(3次) 遺物出土状況(3次)
- 図版7 水口と足跡全景(3次) 足跡近景(3次)
- 図版8 調査前遠景(4次) B区遺構全景(4次)
- 図版9 A区発掘風景(4次) A区検出畦畔と水路(4次) A区溝跡と遺物出土状況(4  
次) A区遺物出土状況(4次) A区遺構全景(4次) A区土層セクション(4次)  
遺物出土状況(4次) 遺物出土状況(4次)
- 図版10 出土遺物 (SD51)(4次)
- 図版11 出土遺物(4次) 出土遺物(4次) 出土遺物(4次) 水口と足跡(3次)  
出土遺物(4次) 出土遺物(3次) 出土遺物(加工木)(4次) 足跡の石膏形(3次)



第1図 地形図  
明治38年（1905年）陸地測量部発行

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

山辺条里遺構は、山辺町の南方約1.5kmの水田地帯にある。山辺町の東をほぼ南北に流れる須川の西岸に位置し、県立山辺高等学校から大塚部落にいたる南北20町×東西12町の範囲が柏倉亮吉氏（註1）等によって古代の条里遺構として推定されている。南北の軸がほぼ真北を指し、長地式を基本とするという。

東北地方の条里制遺構については、古く昭和11年に、深谷正秋氏が全国的な条里の分布を述べた時に、福島県・宮城県・山形県に分布すると指摘し、「羽前山形平野には山形市の東・飯塚村・楢沢村・山辺町付近に残り、庄内では鮎海郡一条村近郊に似たものが残されている」と論じている（註2）。柏倉氏は昭和27年に山形盆地の各地において地籍図等の検討から、整然たる条里遺跡と覚しきものを見出し、その後、庄内平野・置賜盆地においても同様な遺跡が存在することを確認した。山形盆地およびその周辺の山麓地帯では、18地点において条里的地割が確認されたとし、山辺条里遺構もその一つにあげている。これらの条里遺構は、一応共通の計画や原則の下に行われ、坪内割についても山辺条里遺構等で長地式の存在を指摘した。また条里遺構の時期について、古墳との同時的併存関係から古墳時代後期と推察している（註3）。昭和43年に刊行された長野県更埴市条里遺構の報告（註4）は、本県に大きな影響を及ぼし、東根市本郷条里遺構（註5）、山形市大曾根条里遺構（註6）等地下の埋没条里の検出が試みられたが、必ずしも成功したとは言い難い。

昭和40年代後半から、山辺条里遺構の水田一帯にも、大規模圃場整備事業を主とする開発計画が設定され、昭和52年度から工事が予定されることになった。計画では条里遺構の大半が県営大規模圃場整備事業山辺南部地区に含まれ、また条里遺構の南端が山辺町による山辺南部工業団地にかかる。県教育委員会では、県農林部および山辺町と数度の協議の結果、遺跡の広がり等から面工事は止むを得ないとし、できるだけ地下の遺構の保存をはかる方向で、工事前の発掘調査を実施することになった。発掘調査は4次にわたり、第1次調査は、昭和51年7月に山辺南部工業団地に隣接する圃場整備事業の水路地区、第2次調査は、同年10月に山辺南部工業団地の北端地区、第3次調査は、昭和52年6・7月に圃場整備事業の東半部、第4次調査は、同年10月に圃場整備事業の西半部を対象とした。

（註1） 柏倉亮吉 1971「東北地方の条里制遺構」山形史学研究第7号

（註2） 深谷正秋 1936「条里的地理的研究」社会経済史学6—4

（註3） 柏倉亮吉 1968「村山平野の森里制遺跡について」歴史第6号

（註4） 長野県教育委員会編 1968「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」

（註5） 山形県文化財保護協会 1973「東根市西北平担部の遺跡群—古墳から条里へ—」

（註6） 山形県教育委員会 1976「大曾根条里遺構」山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

## 2 調査の経過（第2図・表1）

発掘調査は、対象区域を県営大規模圃場整備事業と山辺南部工業団地予定地内に限定し東西に長い 1100 m × 700 m の基準発掘区を設定した（第2図）。山辺南部工業団地の南半部は北側に比較し 4 ~ 5 m の比高差を持つ河岸段丘となっており、現在の畦畔等から推察しても条里遺構の可能性が薄いので、発掘区域から除外した。地目はほとんど水田である。

基準発掘区は、2 × 2 m 単位のグリッドによって細分し、グリッド番号は、X軸（東西方向）は東から西に 1・2 …… 549・550、Y軸（南北方向）は中央を 0 とし、北と南に各々 1・2 …… 174・175 と名付けた。各グリッド名称はたとえば 150・76 グリッド（G）のように呼ぶことにする。ただし第1・2次調査は、バック・ホールによるトレンチ発掘を行ない、必ずしもグリッドと一致しないため、トレンチ名で発掘区を代行することにした。

調査の経過を、下の行程表を参考にしながら述べる。第1次調査は、調査期間が梅雨期にあたり、軟弱な土壌と相まってトレンチの壁の崩壊が著しかったため、A・B 2 本のトレンチの土層観察だけで調査を打ち切った。第2次調査は、C～E 3 本のトレンチの平面および土層観察から、約 11 m 毎の水田旧畦畔の存在を部分的に確認した。第3次調査は、各次の調査の主体をなすもので、水田旧畦畔による坪内割と、1町を単位とする条里遺構を幾つか検出し得た。第4次調査は、第3次調査による条里単位の推定線を西端地区で再確認したものである。

表1 山辺条里遺構発掘調査行程表

期日 調査内部	1次調査 (昭51)	2次調査 (昭51)	3次調査 (昭52)					4次調査 (昭52)		
	7・12～ 7・16	10・25～ 10・29	10・30 11・2	6・6～ 6・10	6・13～ 6・17	6・21～ 6・24	6・27～ 7・1	7・4 7・6	10・17～ 10・21	10・25～ 10・28
基準杭測量	↔	↔		↔	↔				↔	
発掘区設定	↔	↔		↔	↔	↔			↔	
重機使用粗掘り	↔	↔			↔	↔			↔	
包含層掘り下げ	↔	↔		↔	↔	↔			↔	
面整理	↔	↔	↔		↔	↔	↔		↔	↔
遺構検出			↔		↔	↔	↔		↔	↔
遺構掘り下げ			↔		↔	↔	↔		↔	
断面図実測	↔	↔	↔		↔	↔	↔		↔	
平面図実測	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	
写真撮影	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔	↔

## II 遺跡の環境

### 1 地理的環境

山形盆地は、最上川の流域に並ぶ盆地列の一部であり、東に奥羽山系の蔵王連峰が連なり、西方は、白鷹山(標高 992 m)を最高点とする白鷹丘陵によって区画される。盆地面積は、約 400 km<sup>2</sup>で南北 40 km、東西 10 km で南北に長い盆地であり、東西は舟底状を呈する。

須川は、蔵王山系の舟引山(標高 1172 m)・二ッ森山(標高 1269 m)付近より発し、山形盆地の西縁部を北流し最上川に合流する。

須川の右岸は、蔵王山系より流下する馬見ヶ崎川、立谷川などの河川が西流しており扇状地を形成している。現在の山形市街地は、馬見ヶ崎川扇状地の扇央部に位置しており、盆地の東縁にそって、乱川扇状地、立谷川扇状地、馬見ヶ崎川扇状地とつながっている。

須川の左岸は、盆地の東縁に発達した扇状地によって、須川の流路が山形盆地の西側へ押しやられ、盆地西縁を区画する白鷹丘陵に接している。盆地西縁部の丘陵から平野部へ移行する傾斜変換線付近は、平地が樹枝状に入りこみ標高 200~400 m 程のなだらかな丘陵より東流する数条の小河川が谷を侵んでいる。

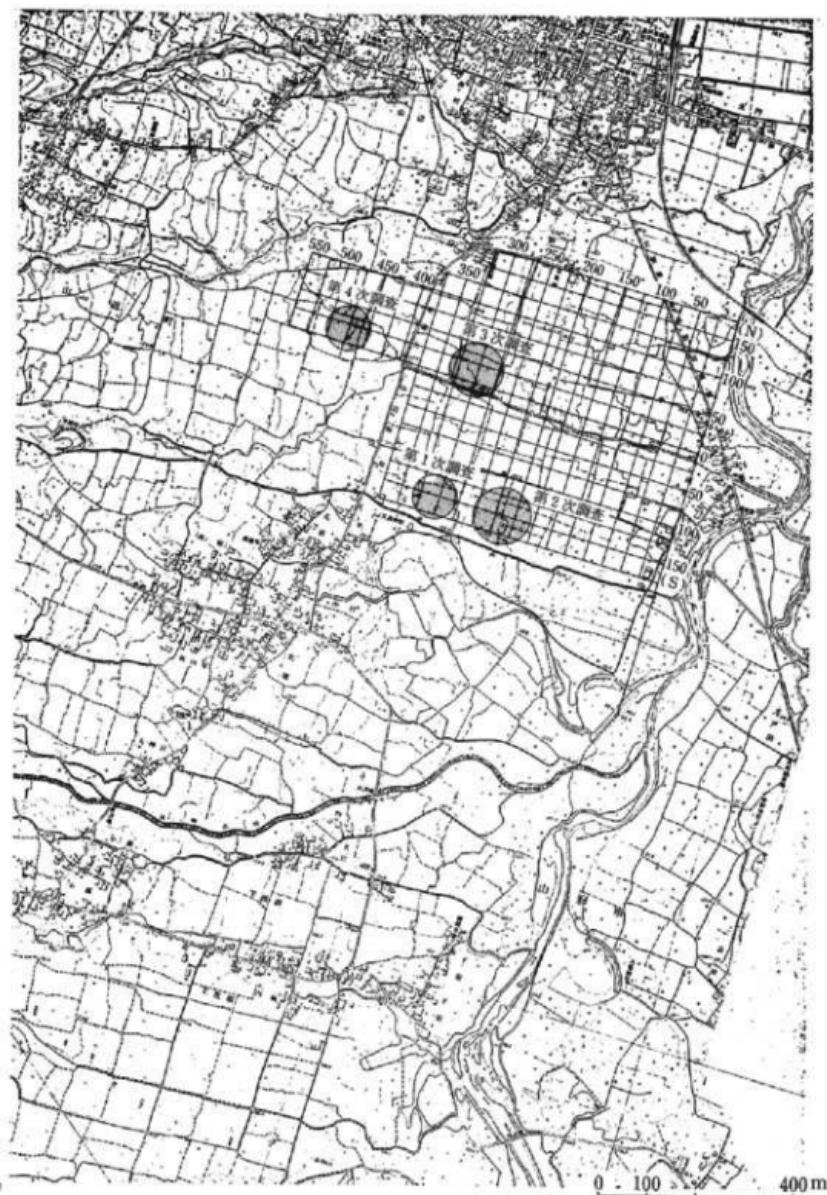
丘陵より流下するこれらの小河川は、小規模な扇状地を形成し連絡しており、須川に向って傾斜する地形面を形成している。この地形面は、須川によって侵食されて段丘状を呈している。

山形盆地における条里遺構は、いずれも盆地の縁辺を区画する丘陵より流下する河川によって形成された大小の扇状地末端部に認められ 20 数ヶ所に確認されている。

山形盆地では、東根市・東根温泉付近、山形市西南部一帯、山辺町南部、中山町西部などに大規模な条里遺構が認められる。

山辺条里遺構は、山辺町南部の山辺部落、根際部落、大塚、三河尻などの諸部落に囲まれた地域に東西 12 町 × 南北 20 町 の範囲に認められる。地形的には、白鷹丘陵の末端部、平野部へ移行する傾斜変換線付近では標高約 110 m を測り須川へ向ってゆるやかに傾斜する。白鷹丘陵より流下する後明沢川ほかの小河川によって形成された複合小扇状地の扇央部からその末端に認められる。

須川西部一帯は、中山町西部から、山辺町南部、山形市西部まで断続しながらも一連の条里遺構が認められている。山辺条里遺構は、須川西岸地域に認められる条里遺構の一つである。



第2図 全体図

## 2 歴史的環境

山辺条里遺構は、山形盆地の西部、須川の西岸に位置する。須川西岸地域では、中山町、柳沢付近から、山形市谷柏まで一連の条里遺構が確認されている。特に、山辺町南部付近、山形市大曾根付近に大規模な条里遺構が認められる。

須川西部地域は、山形盆地の西縁を区画する白鷹丘陵に近接し、丘陵より東流する数条の小河川によって小規模な扇状地を形成しており、多くの遺跡が群集している。

山形盆地南半部には、弥生時代の遺跡が集中しており、須川西岸、白鷹丘陵より流下する本沢川の扇状地先端部に谷柏遺跡がある。谷柏遺跡は、扇状地末端の湧水地帯にあり、微細な横走繩文、平行沈線による連續山形文、連弧文を併なう土器片が出土しており、桜井式併行期と考えられる。

また、古墳時代前期の遺跡としては、山形市谷柏、同萩原、同二位田寺裏、同柏倉坊屋敷などがあり、山辺町大塚にも当該期の集落跡が認められる。山形市柏倉坊屋敷遺跡は、白鷹丘陵より流下する小河川によって、平野部が深く入り込んだ谷頭の河岸段丘に立地し、數軒の竪穴住居跡が検出されている。当該期の遺跡は、他に小河川の河岸段丘、自然堤防上の微高地に立地し、この地域が、比較的早くから農耕文化が定着、発展した事が認められる。

山形盆地の西縁部丘陵には、山形市菅沢古墳2号墳、同大之越古墳などの古式の古墳が確認されている。菅沢古墳は、山形市菅沢、山崎部落の背後にある丘陵の頂に営まれ、2号墳は、二段構築の円墳で底径56mを測る。これらの古墳は、平野部に所在する集落跡との関連性から、当地域における農耕文化の発展が考えられる。

また、須川西部地域に分布する一連の条里遺構と関連して、当該期における集落は、沖積地にも広く分布し、山形市谷柏、同二位田、同谷柏から山形市大曾根付近にかけて、広大な集落が営まれたものと推測される。

山形盆地の西縁丘陵には、この時期の群集墳が多数分布し、山形市谷柏古墳群、山辺町坊主窓古墳群、同壇の山古墳群などがある。これらの古墳群は、いずれも平野部に接近した丘陵の山頂部から、平野部に面する斜面に営まれている。

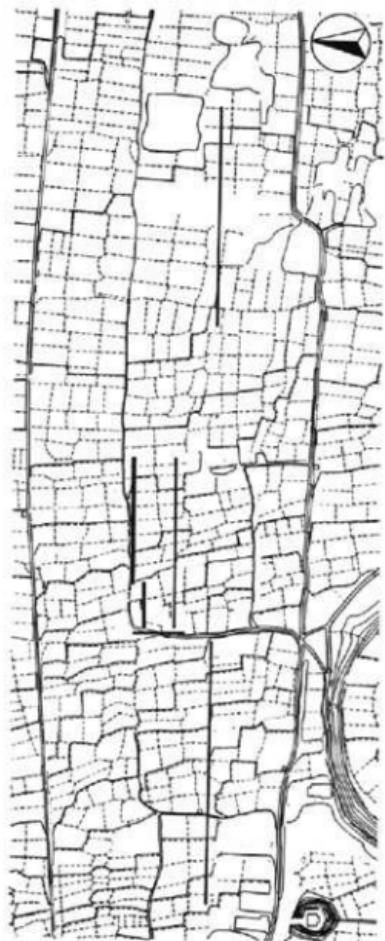
山形西部の須川西岸地域は、山形盆地内でも比較的多くの遺跡が分布し、早くから農耕文化の発展、定着した地域であり、律令制下においては、須川西岸一帯に分布する条里遺構と、集落の関連、及び山形盆地西縁の丘陵に分布する群集墳など、一連の関連が認められる地域である。

### III 遺跡の概観

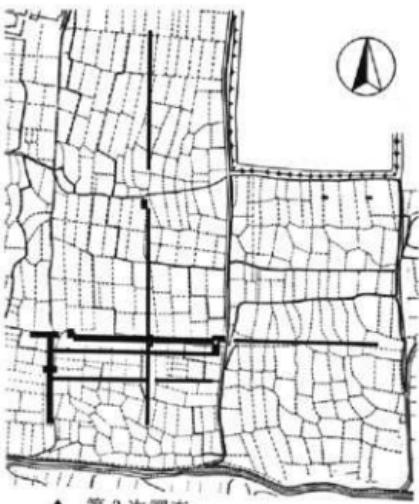
#### 1 畦畔の現状

山辺南部・須川西岸域には、一辺が約120m前後の大きな区画で地割された水田が、東西1440m(12町)、南北2400m(20町)ほどの規模をもって整然と広がっている。このような水田のあり方は、古代の条里制的景観を彷彿とさせるが、本来の条里の跡といかに係わり合うのか、調査によって検出された埋没畦畔のあり方といかなる相異を見せるかと云った検証のためにも、調査区域における現水田(畦畔・水路等)の概観は、条里制遺構研究上不可欠な要素と考えられた。以下では、説明の便宜上、必ずしも適切な方法とは思えないが、「現条里(様)水田が過去からの伝世物」との仮定のもと、一町四方で区画される水田を「坪」、さらに区画内の地割に「坪内割」などの用語を用いる事にする。坪を区画する畦畔は、幅員が1~1.5m程度のものが多く認められ、作業用農道としての役割を兼ねるものが多い。さらに、各坪を区画する畦畔は、そのあり方から、二条平行に走らせ、間を水路として用いるものと、水路を伴わない一条だけのものがある。前者は、幅員が必ずしも同じではなく、いざれか一方が補助的なあり方を呈する場合が多い。各坪は、西に高く東に低い地形上の制約から、南北方向により平坦で、東西方向での段差が大きくなっている。各坪への用水は、上で述べた地形との関係上、東流する小河川の上流(山麓)で取水し、坪間の畦畔によって形成される水路に導入されて南西の坪から北東の坪へ順次配水されるしくみになっている。また、一つの主要水路でまかなえる坪数は、南北方向の2町幅で東西向きと考えることができ、その事は、南北6町の範囲に三つの主要水路がある事からも理解できる。また、坪を囲む水路の交点(坪の四隅)では、三次調査区で認められたような用・排水に係わる施設等が設けられる場合があり、そこでは、余分な用水を一旦貯える小規模な水量調節や、水温を上昇させるといった機能を持つものと想定できる。(第6図現畦畔上部)

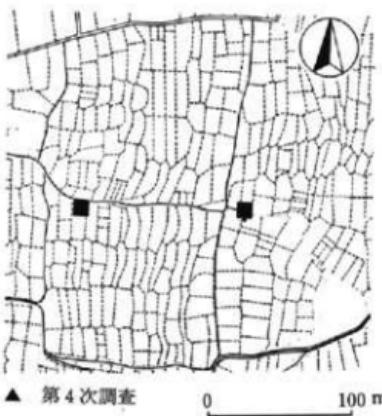
次に坪内割を見てみると、西に高く東に低い地形上の制約から、南北方向に細長い水田を基調とし、東西幅が8~12m前後で、坪の東西辺を10~15区分したものが多く認められる。南北方向では、20~30m幅の間隔で南北辺を4~6区分し、一坪内の水田が40~90面といった割合で面取りされ、個々の水田の面積は200m<sup>2</sup>~300m<sup>2</sup>(2畝~3畝)程度のものが最も多い。これら坪内割の水田を区画する畦畔は、幅員が50cm未満30cm以上のものが多く、南北隅と、北東隅に水口を設け、用・排水口とするものが一般的であった。すなわち、東西方向の狭い一辺から用水を取り入れ、南北方向の長い一辺に沿って水を流し、北西隅の排水口へといった経路を取るもので、次の水田では前の排水口が取水口とする。



▲ 第1次・第2次調査



▲ 第3次調査



▲ 第4次調査

第3図 調査区と現畦畔概況

## 2 遺跡の層序（第4図・図版）

遺跡は、西から東へ $\frac{2}{100}$ ～ $\frac{3}{100}$ 程度の緩やかな勾配を持つ傾斜面に広がっている。良好な埋没畦畔を検出する事のできた第3次・第4次調査区域は、須川と山麓線のほぼ中央に位置し、推定条里水田地帯のほぼ中央にあたる。標高は、104～112mを測る。調査によって知る事のできた堆積層は、基本的に7枚の層が認められ、上から順次I～VII層と命名した。これらの各層は、混入物等の違いからa～e等に細分し、より細かな堆積状況を観察した。以下、各堆積層の状況と分布・検出畦畔との関係について概略を述べる。

### 〈第I層〉

第I層は、現水田の耕作土、畦畔を形成する土層で、全体的な色調は暗褐色である。層の厚さは、15～20cmで、田面一帯にほぼ均等に分布している。I層下部からII層直上面にかけて、中・近世から現代に至る各時期の陶磁器片が若干出土している。

### 〈第II層〉

第二層は、I層に較べ、締まりがあり、粘性もある。色調は、茶褐色で、I層より暗い。層の厚さは、15～30cmあり、所によって薄くなる部分も認められたが、調査区域全面に分布している。遺物の出土は直上面に限られ、層中からの出土例はない。

### 〈第III層〉

第三層は、色調が暗褐色で、粘性のある均質な層である。層の厚さは、10～20cmで、調査区の大部分に分布しているが、所によって希薄、あるいは、認め得ない地点も認められた。土質は、以下で述べる第V層に類似し、第4次調査区域の畦畔構造を形成する土層である事などから見ても、ある時期における水田の土層と考えられる事ができる。第4次調査A地区では、III層を掘り込んで作られた溝（SD51）から、奈良・平安時代と考えられる土師器・須恵器がまとめて出土している。

### 〈第IV層〉

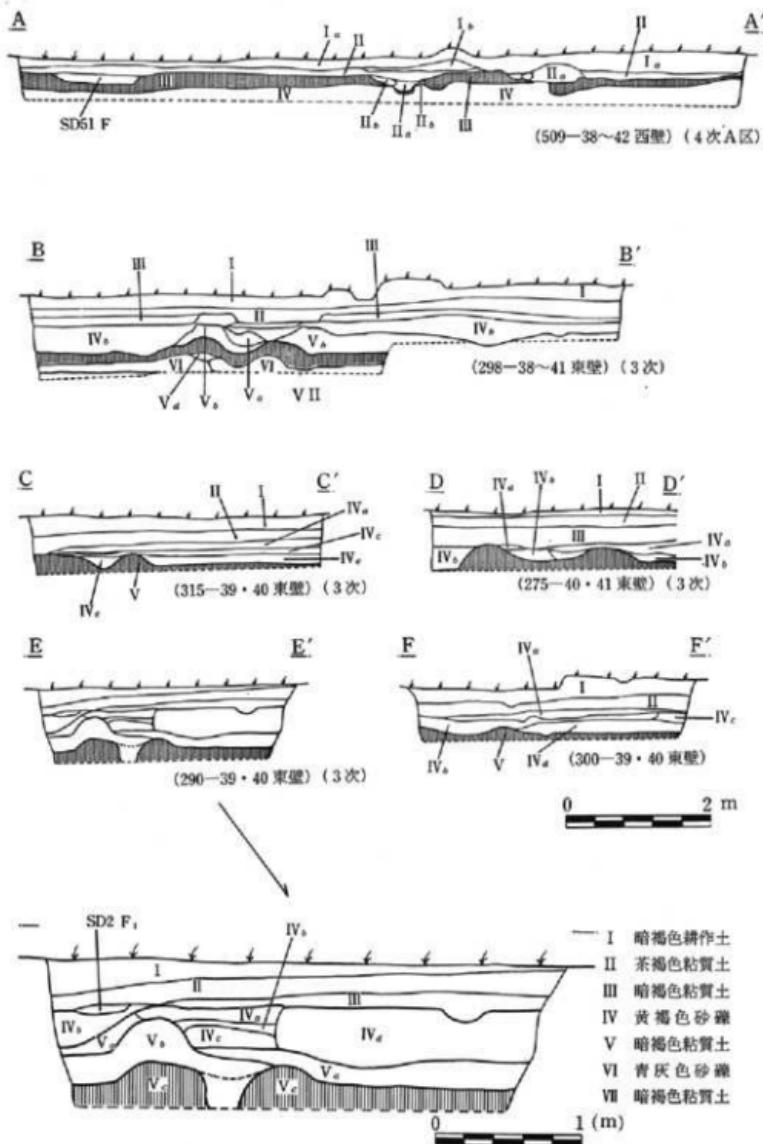
第四層は、色調が黄褐色の砂・小砾よりなる層で、河川による氾濫層と考えられる。層の厚さは、30～50cmで、西側で薄く、東側で厚く堆積していた。分布範囲は明確ではないが、第3次調査区域の北側では希薄になっている。

### 〈第V層〉

第五層は、暗褐色粘質土で、砂礫等を含まない均質な土層である。層の厚さは、20～30cmで、第3次調査で検出された埋没畦畔を形成し、上面から須恵器等の遺物を出土する。

### 〈第VI・VII層〉

第六層はグライ化した青灰色砂礫層で、第七層は、暗褐色粘質土である。いずれも土層観察用の深掘りを行なった箇所で認めたもので、分布、性格については不明である。



第4図 土層図

## IV 検出された遺構

### 1 第1・2次調査（第5図・図版）

#### A トレンチ

第1次調査で発掘したもので、条里遺構推定地の中央部に位置し、幅1.2m×長さ180mの東西に長いトレンチである。表土からV層上面まで約140cm掘り下げている。III・V・VII層の3枚が有機物を含む暗褐色粘質土層で、トレンチ壁の断面観察により、V層面で一部遺構が確認できた。トレンチの中央付近4ヶ所(18・19区, 29区, 49~51区, 56~57区)で、水田畦畔と思われる土堤状の高まりが溝を伴って発見された。畦畔の幅は約40cm、高さは約20cmを測り、方向はほぼ南北方向を示す。畦畔と畦畔の間隔は、西から順に約22~22~11mである。各畦畔の上面から溝の覆土には、黄褐色砂礫(IV層)が層をなして堆積しており、少くとも現畦畔より古い時期のものであることが確実である。遺物は発見できなかった。

#### B トレンチ

第1次調査で発掘したもので、条里遺構推定地の中央南側やや西寄りに位置する。幅1.2m×長さ150mの東西に長いトレンチで、深さはV層上面まで約70cm掘り下げている。雨による壁の崩壊がひどく、遺構や遺物は発見されなかった。

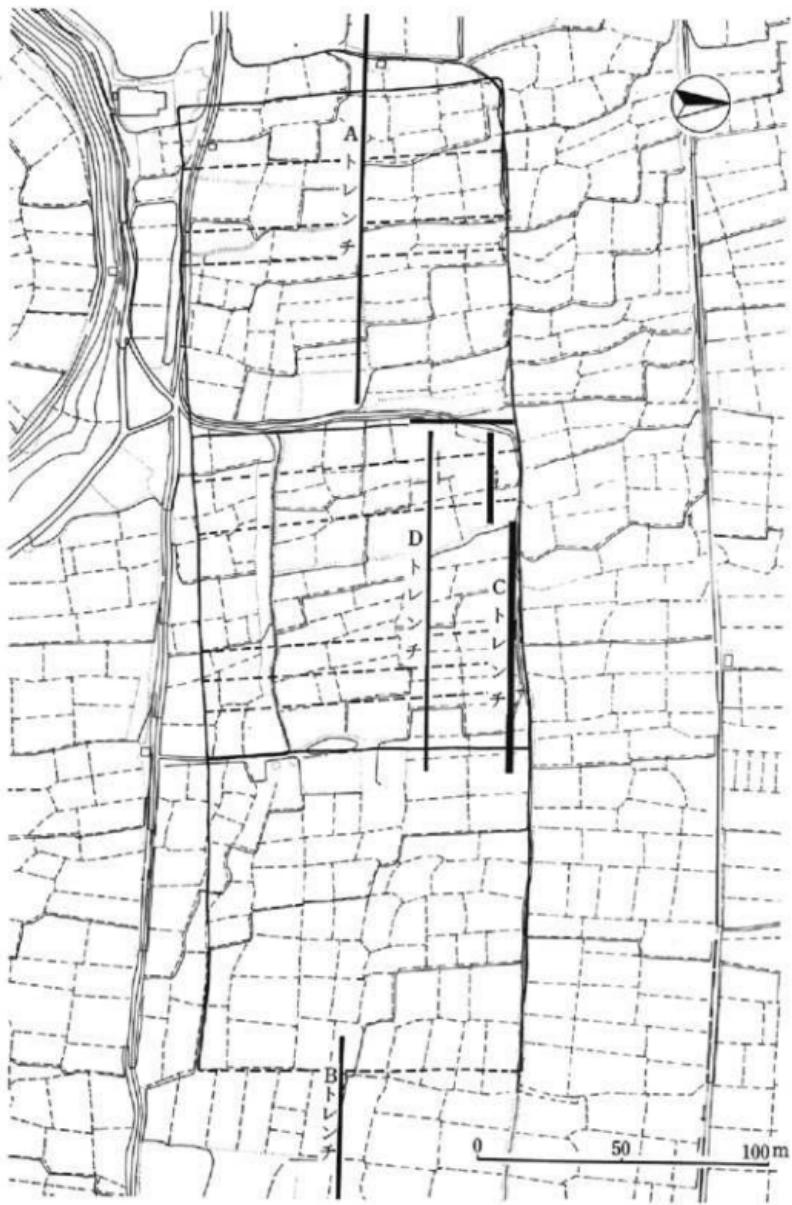
#### C・D トレンチ

第2次調査で発掘したもので、条里遺構推定地の南端中央部に位置する。各々幅2m×長さ150mの東西に長いトレンチで、並列する。深さはV層上面まで75~110cm程掘り下げている。Cトレンチのほぼ全面とDトレンチの西側でV層面から計11ヶ所畦畔と水路が検出された。

これらの畦畔や水路は南北方向に延び、方位は真北より約8度西に傾いた磁北に近い向きを示す。両トレンチで検出された畦畔や水路の比較から、長地式の坪内割を持つ6枚の水田の存在が推測される。畦畔間の東西間隔は、西から各々9.3m、9.4m、12.3m、10.6m、10.4m、17.6mを測る。埋没水田遺構にやや斜行する2本のトレンチのみの発掘で、必ずしも正確な数値とは言い難い。遺物は発見されなかった。

#### E トレンチ

第2次調査で発掘したもので、C・Dトレンチ西端に隣接する幅1m×長さ35mの南北に長いトレンチである。深さはV層上面まで75cm掘り下げている。トレンチ南側で東西に長い畦畔が3本、水路が2本検出された。畦畔の幅は、北から各60、140、180cm、水路の幅は、140、90cmである。



第5図 1次・2次調査部分図

## 2 第3次調査

第3次調査で検出した遺構には、大小の畦畔、および水路跡等からなる水田遺構をはじめ、溝跡、河川跡などがある。ここでは、各遺構の説明上、グリッド番号で(200-39・40)～(327-39・40)列にあたる調査区を、西から順にA～H区と命名し、各地区毎に概述する。なお、畦畔は(S N記号)、水路・溝には(S D記号)、取水・排水口は(E D記号)、水田面は(S J記号)を用いて各々を区別した。

### 〈A区〉(第7図)

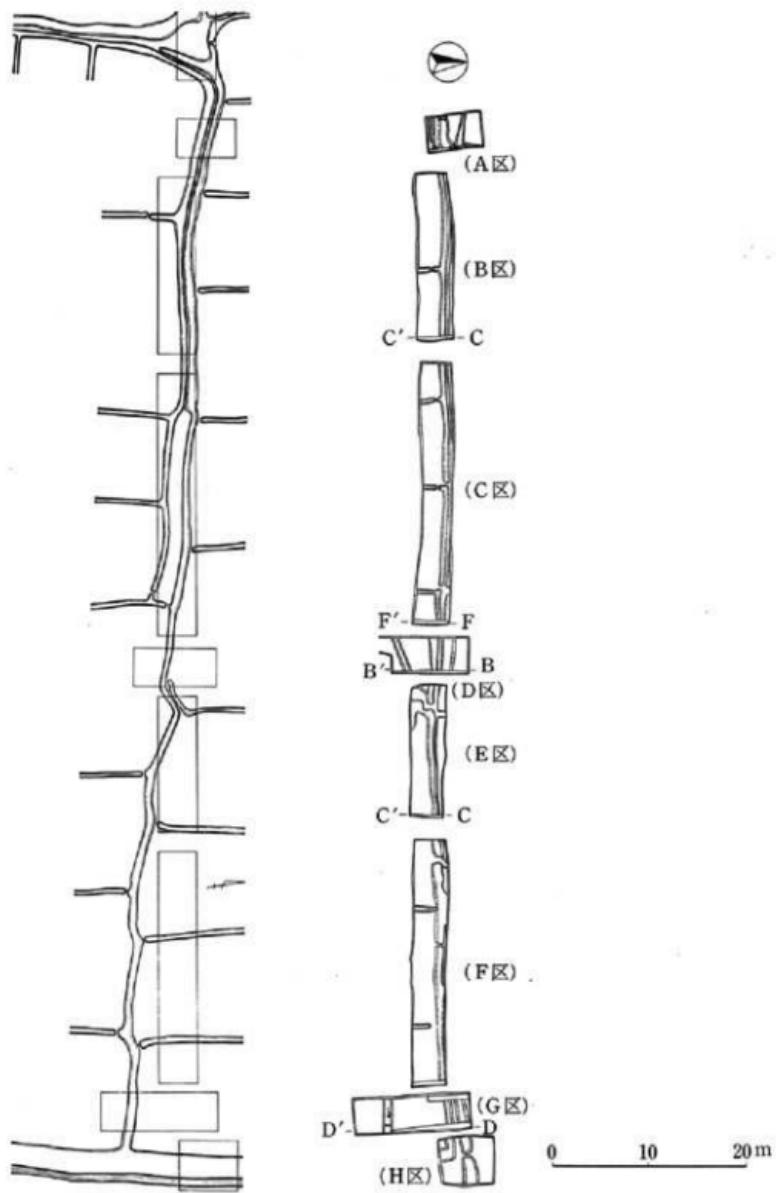
A区では、東西4m、南北6mの調査範囲に、大小の畦畔(SN23・SN24・SN25)と、水路(SD2)、水口(ED12・ED13)、溝跡(SD14)が検出され、さらに、これらによって区画された水田面を2つ想定できた(SJ15・SJ16)。SN23は、幅が1mあり、水路底面および、水田面からの高さは、23～25cmほどである。SN24は、幅が50cm前後で、水路底面からの高さは、31cmある。排水口(ED12)は、SN24を切るもので、上端で30cm下端で20cmの規模を持つ。SD14は、SJ15を切るもので、同時期のものとは考えられない。規模は、深さ10cm、幅40～90cmである。ED13は、SN23を切るもので、幅20cm、深さ7cmの規模があり、水路底面より12cm高い底面を持つ。ED12等とは性格の異なるものであろう。これらの各遺構は、V層によって形成されるもので、現地表下50～60cmに検出された。

### 〈B区〉(第7図)

B区では、東西18m、南北4mの調査範囲に、A区から連なる畦畔(SN24・SN23)と水路(SN2)が続き、新たに、水田(SJ17)と水田(SJ18)を区画する畦畔(SN26)および付属する水口(ED8)が検出された。B区での畦畔(SN24)は、幅が70cmあり、SN23は、トレーナー壁に掛るため不明である。水路(SD2)は、上端で70cm、下端で50cmあり、底面のレベルが、西に高く東に低い事から、用排水は東流していたものと考え事ができる。水田(SJ17)と水田(SJ18)を区画する畦畔(SN26)は、幅50cm、SJ17との比高は5cmで、SJ18との比高は、22cmである。水口(ED8)は、幅20cm前後で、この水口を挟む畦畔(SN26)に、明確な4個人間の足跡が検出された(第11図7・8)(図版10)。SJ17とSJ18の高低差は、11～15cmで、SJ17が一段高い。

### 〈C区〉(第7図)

C区では、東西27m、南北4mの調査範囲に、A・B両区から連なる畦畔(SN24・SN23)、水路(SD2)の他、水田(SJ18・SJ19・SJ20・SJ21)を区画する南北に走る3畦畔(SN27・SN28・SN29)、および付属する水口(ED7・ED6・ED10・ED11)が各々検出された。畦畔(SN27)は、幅50cmで、SJ18との比高は8cm、SJ19との比高は20cmある。畦畔(SN28)は、40～45cmで、SJ19との比高は6cm、SJ20との比高は、20cmである。畦畔(SN29)は、



第6図 3次調査（現畦畔と検出畦畔）

幅45cmで、SJ20との比高は、7cmで、SJ21との比高は、11cmである。次に、水口(ED7)は、下端で15cm、上端20cmの幅があり、ED6は、下端20cm、上端30cmの幅を持つ。ED9は畦畔(SN24)を切り、水路(SD2)と水田(SJ19)を結ぶ水口で、その規模は、下端で30cm、上端で45cmである。同様の、ED10は、下端で30cm、上端で40cmの幅を持つ。ED11は、水路(SD2)から北へ分岐する水路口と考えられるもので、下端で37cm、上端で85cmの幅があり、SD2より一回り規模が大きい。この部分のSD2の底面には、5~10cm大の礫が20数個まとまっているのが認められた。B区の主として南側に検出された4枚の水田は、SJ18→SJ19→SJ20→SJ21の順に一段ずつ低くなり、各々の高低差は、最も大きい数値で示せば、10cm、21cm、15cmとなっている。また、南北に走る畦畔と畦畔との間の距離は、SN27とSN28で8.9m、SN28とSN29で10.75mを測る。(測点は、いずれも畦畔の中心と中心)

#### 〈D区〉(第7図)

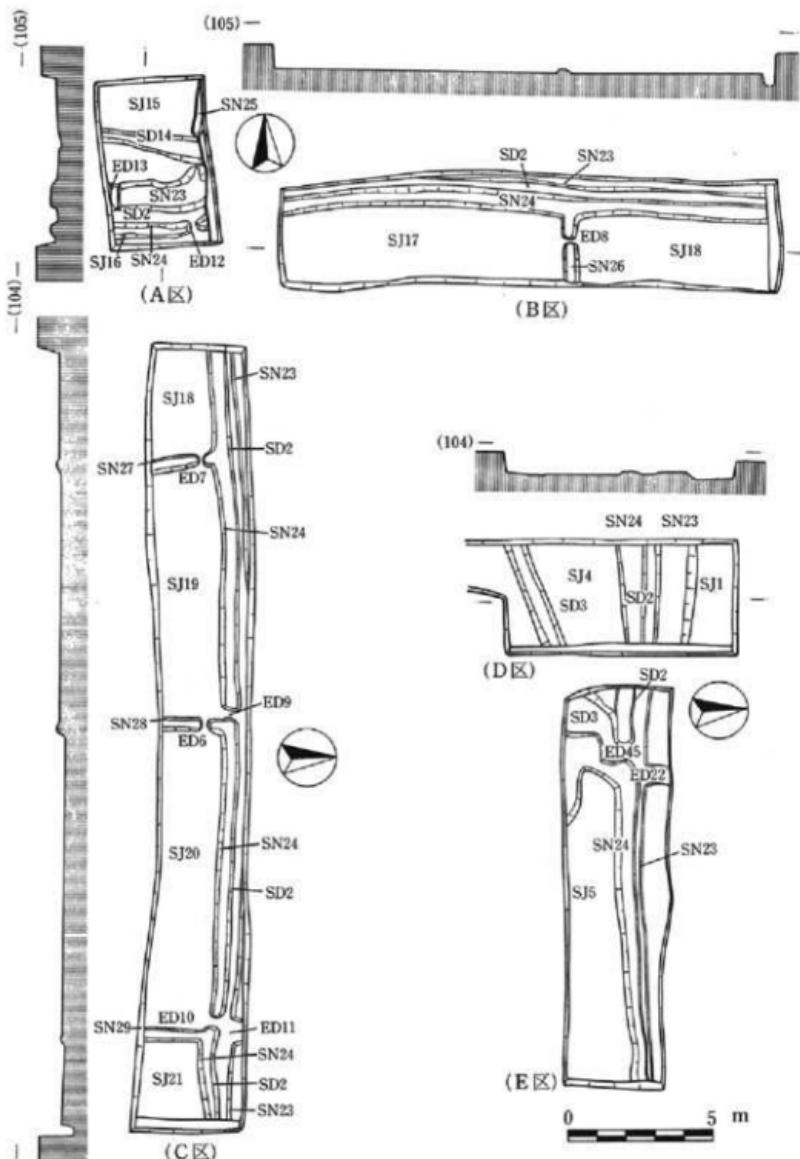
D区では、東西4m、南北8mの調査範囲に、A・B・Cの各調査区から連なる畦畔(SN23・SN24)と水路(SD2)の他、溝(SD3)および、SN23とSN24によって画される2枚の水田(SJ4・SJ1)が各々検出された。D区でのSN23は、幅が下端で140cm、上端で95cmと大きい。SN24は、下端で92.5cm、上端で70cmの幅を持つ。SD3は、西南西から東北東へ走る溝で、下端40cm、上端70cmの幅があり、深さ15cmを測る。SN24・SN23等と方向が異なり、SJ4を斜めに切り込む事などから考えて、同時期のものとは考えられない。以上の遺構は、現地表面から、50~70cm下に検出されている。

#### 〈E区〉(第7図)

E区では、東西14m、南北4mの調査範囲に、D区から連なる畦畔(SN24・SN23)水路(SD2)の他、D区から続くと考えられる不整な溝(SD3)、水口(ED45・ED22)、水田(SJ5)が検出された。E区でのSN24は、西側で幅が広く、東に行くに従って細くなっている。幅は、50~80cmあり、SJ5との比高は13~30cm程度で、西側では畦畔と田面の差が大きくなっている。SJ5の上面および、これを覆うIV層下部に、摩滅した土師器・須恵器の小片がややまとまって検出された。(図版5)、水口(ED45)は、下端で45cm、上端65cmの幅がある。同じくED22は、下端で80cm、上端で90cmの幅があり、SD2から北へ向う水路口となっている。深さは17cm前後である。

#### 〈F区〉(第8図)

F区は、東西24m、南北4mの調査範囲に、畦畔(SN24)、水路(SD2)の他に、水田を区切る畦畔(SN32・SN36)、水口(ED30・ED33・ED35)があり、これらによって形成される3枚の水田(SJ31・SJ34・SJ37)が各々検出された。SN23は完全にトレンチから外れ、SD2も半分以上トレンチ外北側へ外れている。このことは、東西に走る畦畔・水路が、正東西



第7図 3次調査畦畔遺構部分図(1)

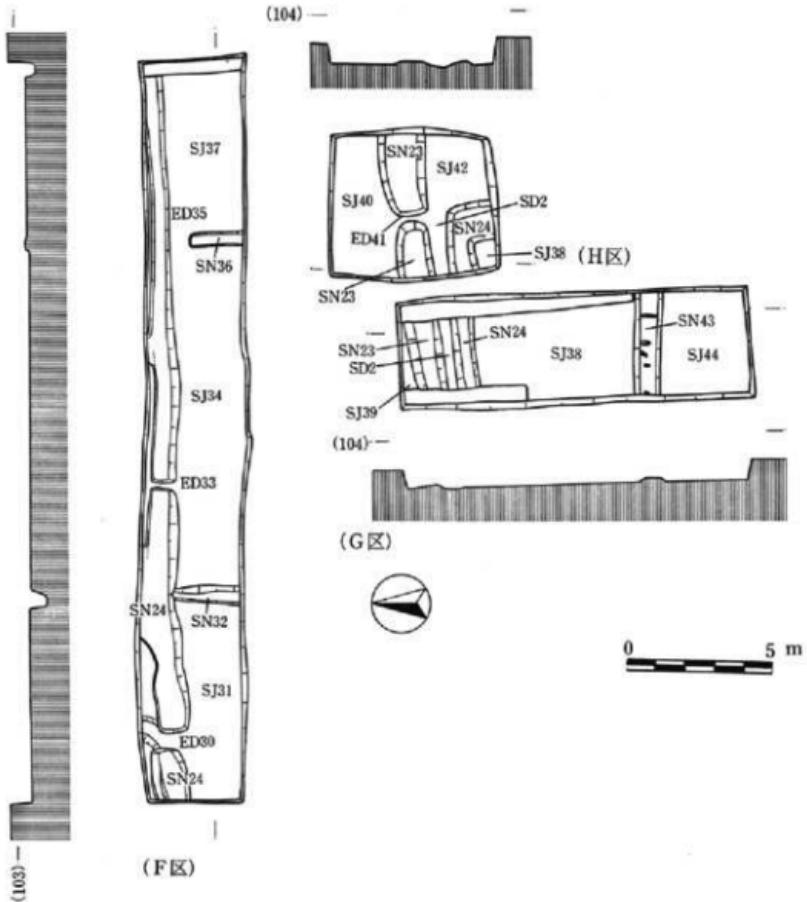
ではなく、わずかながら北へ傾いている事を示している。SN32は、下端60cm、上端30cmの幅があり、SJ31との比高は15cm、SJ34との比高は20cm前後で、SJ31がSJ34より11cm～26cm高くなっている。ED30は、下端50cm、上端75.5cmの幅があり、SN24を切ってSD2とつながる。ED33は、下端20cm、上端35cmの幅があり、ED33と同じくSN24を切ってSD2につながっている。SN36は、SJ34とSJ37を区切る畦畔で、下端45cm、上端35cmの幅があり、SJ34との比高は15cm、SJ37との比高は17cm程度を測る。SJ34とSJ37との高低差は、10～14cmで、SJ34が一段高くなっているものの、SJ17とSJ18のような明確な段差を認めるることはできない。ED35は、SJ34とSJ37を結ぶ水口で、幅65cmを測る。

#### 〈G区〉(第8図)

G区は、東西4m、南北12mの調査範囲に、畦畔(SN23・SN24)、水路(SD2)の他、調査区南側の現畦畔下にSN43、杭列が各々検出されたが、SN43と杭列は、ごく最近までの新しい時期の所産を考えられた。G区でのSN23は、下端110cm、上端50cmの幅を持ち、SD2の底面からの高さは20cm前後を測る。SN24は、下端95cm、上端35cmの幅を持ち、SD2の底面からの高さはSN24同様20cm前後を測る。次に、これら畦畔で区切られる水田(SJ38・SJ39・SJ44)の各高低差をみて見ると、SJ44→SJ38→SJ39の順に低くなり、高低差は、SJ44とSJ38で8～10cm SJ38とSJ39で7～10cmを測る。

#### 〈H区〉(第8図)

H区は、東西4m、南北4mの調査範囲で、調査区一連の畦畔(SN23・SN24)が検出された他、SN23を切りSJ40とSD2、SJ42を結ぶ水口(ED41)が検出された。H区でのSN23、SN24は、しっかりとしており、SN24は、ほぼ直角に南へ折れ曲がるのが注目される。同時に、SD2は、SJ42へ至って消滅し、「坪」の北東隅にあたることを推測させた。南へ折れるSN24は、下端130cm、上端90cmの幅があり、SJ42からの比高17～20cmを測る。SN23は、最大で、下端150cm、上端100cmの幅があり、SJ40からの比高17～20cmを測る。ED41は、下端20cm、上端35cmの幅を持ち、深さ10cmを測る。これら畦畔で区画される3枚の水田(SJ38・SJ40・SJ42)は、SJ38→SJ40→SJ42の順に低くなり、SJ42へ水が流れ込む状況となっている。高低差は、SJ38とSJ40で14cm、SJ40とSJ42で10cm前後を測る。



第8図 3次調査畦畔遺構部分図(2)

### 3 第4次調査

第4次調査は、第3次調査の際検出したSN23・24畦畔を西側に約300m延長し、1町四方の区画交点の検出を目的としたものである。2ヶ所設定した10m四方の発掘区を、便宜的に西側をA区(504~509-37~42G)、東側をB区(448~453-38~43G)と呼ぶ。

#### 〈A区〉(第9図・図版9)

A区では、10m四方の調査範囲に、大小の畦畔(SN52・55・57・62)と、水路(SD53・54・56)、水口(ED58)、溝跡(SD51)が検出され、さらに、これらによって区画された水田面を3つ想定できた(SJ59~61)。

遺構の検出面は、III層暗褐色粘質土上面で、表土からの深さは、15~35cmである。第I層の耕作土との間には、II層の砂を少量含む茶褐色粘質土層があり、層序的に区別される。III層の下面にはIV層黄褐色砂礫層が存在するが、調査期間等の都合からV層暗褐色粘質土面の確認までは至らなかった。

SN52は、幅が50~80cmで、水路底面および水田面からの高さは、20cm前後である。SN55は、幅が40~130cmで、西側がかなり広くなる。水路底面および水田面からの深さは20cm前後である。SN57は、幅が30~50cm、長さが6m、水路底面からの高さが8cm前後である。各畦畔の重複関係は認められない。水路のうちSD54はSD53とSN55を切って作られている。

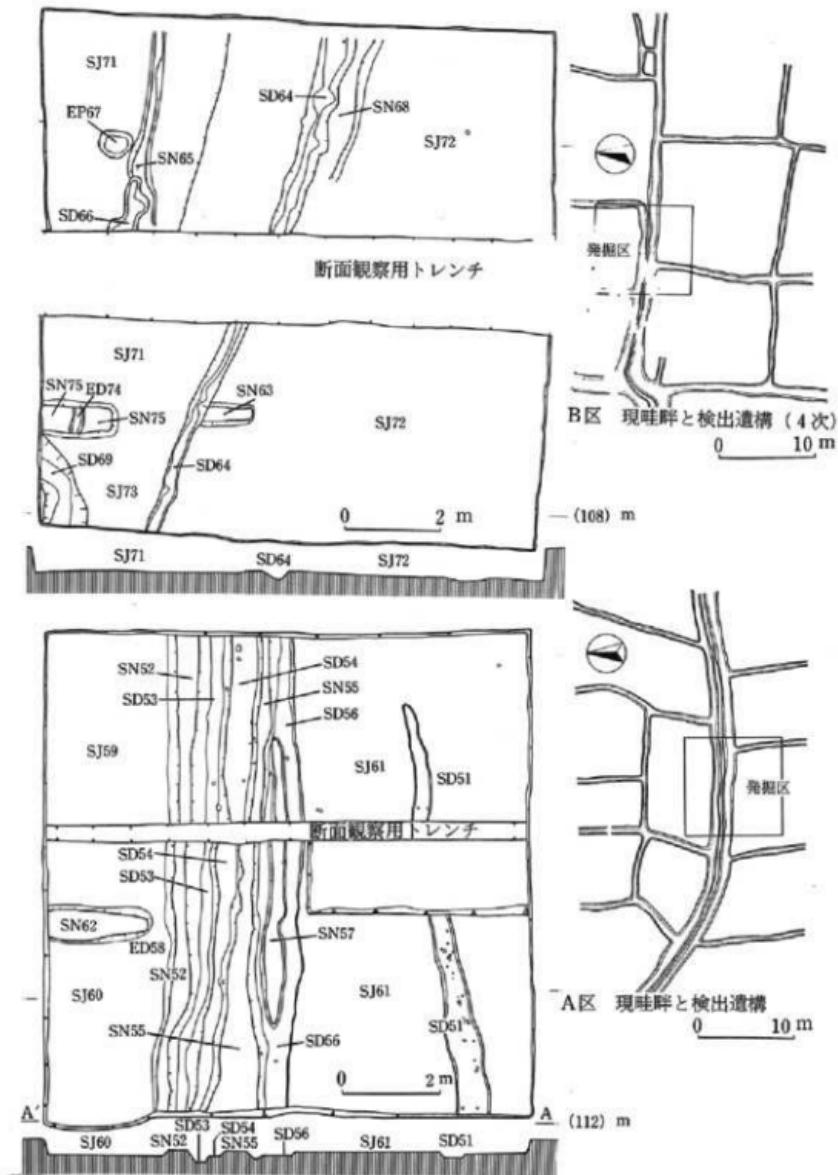
SN62は水田(SJ59~60)を長軸方向に区画する畦畔で、幅70cm前後、水田面からの高さ5~8cmを測る。SN52等と同時期と考えられるもので、南端に水口(ED58)様の切り込みを有する。SN57の南側には、水田(SJ61)を長軸方向に区画する畦畔は検出できなかった。水田面は第III層暗褐色粘質土で、凹凸は認められないが、東側にやや傾斜を示す。これらの遺構の方位は、SD54を除き、発掘区に平行し、南北軸がほぼ真北を向いている。

本発掘区で注目されるのはSD51で、層位的にII層下に位置し、III層の水田面(SJ61)を掘り込んで作られている(第4図最上段土層図参照)。幅が30~70cm、水田面からの深さが10cm前後で、西側が幅広くなっている。東西方向に長く、方向はSD56等に比べ北に傾いている。覆土は、黄褐色砂の單一層で、比較的しまりが良い。

溝内から土師器・須恵器がまとめて出土し、条里遺構の時期を知る上で重要な資料を得た。土師器は、丸底の杯・鉢・甕などの器形があり、須恵器は、杯・碗・蓋・鉢・甕などの器形がある(第10・11図、図版10)。

#### 〈B区〉(第9図・図版8)

B区では、10m四方の調査範囲に、畦畔(SN63・65・68・75)と、水路(SD64・66)、



第9図 4次調査畦畔遺構と現畦畔

水口 (E D 71)、溝 (S D 69)、ピット (E P 67) が検出され、さらに、これらによって区画された水田面を 3 つ想定できた (S J 71~73)。

遺構の検出面は、III層暗褐色粘質土上面で、表土からの深さは、50~70cmである。発掘の中央部2m幅だけ、V層暗褐色粘質土上面までさらに 30~50 cm 挖り下げたが、湧水がひどく中途で調査を断念した。III層と I 層の間に、II層の砂を含む茶褐色粘質土層があり、層序的に区別される。

S N 65 は、幅が26~45cm、水田面からの高さは3~5cmである。S N 68 は、幅が60~80cm、水路底面および水田面からの高さは10cm前後である。東側の一部が検出されただけで西側については不明である。S N 75 は、水田 (S J 71~73) を長軸方向に区画する畦畔で、幅が70~80cm、水田面からの高さ2~7cmを測る。南端に幅20cm、深さ3cmの水口 (E D 74) を有する。S N 63 は、高さ2cm前後の畦畔様の高まりであるが、S D 64 に切られており、なお検討が必要である。このほかの重複関係として、S N 65 は S D 66 によって切られている。

B 区は、全体的に III 層暗褐色粘質土が薄く、畦畔の確認が困難であった。また畦畔や水路ないし溝の方向も、A 区とは異なり、真北よりもやや南に傾く。とくに S D 64 は、真北に対し 20 度近く南にふれており、その他の遺構と時期的に異なる可能性が強い。

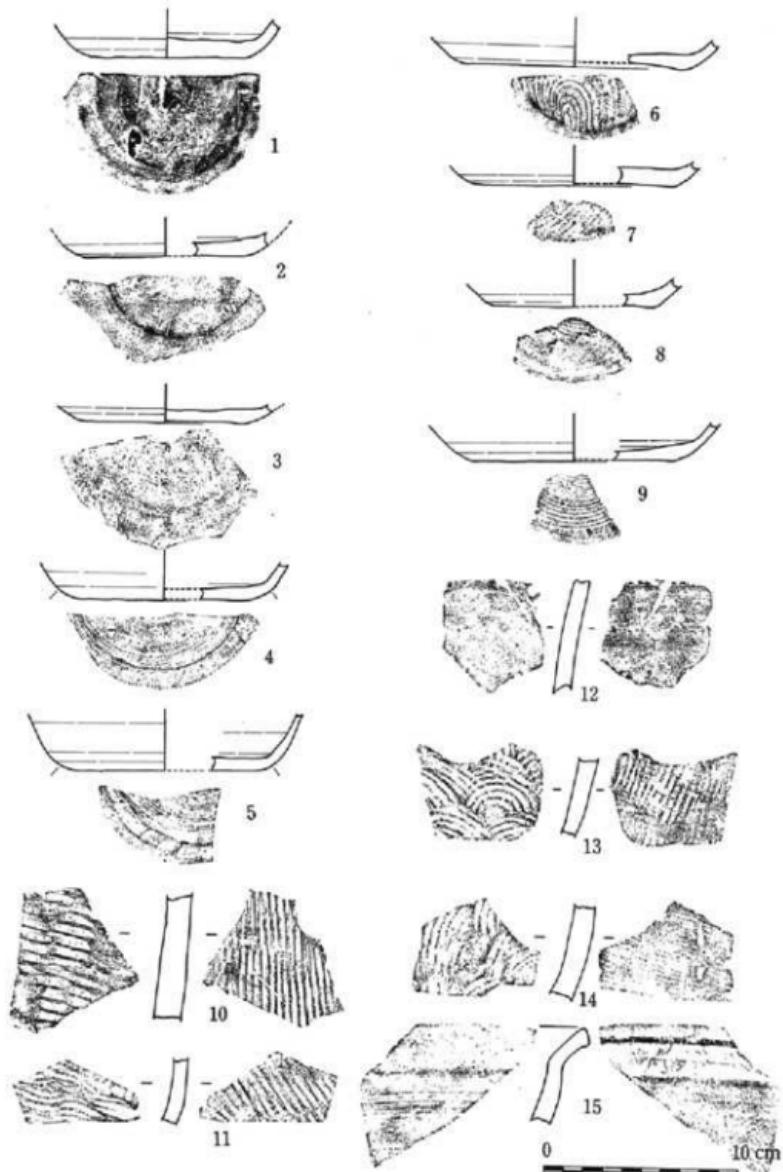
B 区から出土した遺物には、土器、畦畔に用いられた矢板杭などがある。土器は少量 II 層および III 層直上から出土した。須恵器の杯・壺形土器の小片が主である (第 10 図)。

## V 出土遺物

山辺条里遺構の第 1 次~第 4 次調査では、第 3 次・第 4 次調査区域を中心に遺物が出土している。しかし、量的には僅かで、整理箱にして概ね 3 箱程度である。出土遺物は、土師器・須恵器を中心に、二三の加工痕ある木片・杭、その他桃など果実類の種子があり、特殊なものに、畦畔に残された「人の足跡」がある。以下では、第 4 次調査で溝跡 (S D 51) からまとまって出土した土器群を中心に、その他の調査区から出土した遺物も含めて説明を行う。(図示し得たものについては、出土箇所、層位、遺構を欄外に記した。)

### 〈土師器〉(図版 10、5)

土師器は、全形の窓える杯一個体を除いて、すべて小破片で、磨滅の著しいものである。器種別では、内黒杯 13 片、甕口縁部 6 片、その他器種器形の不明な体部破片 178 がある。全形の判る杯 (第 11 図 2) は、丸底を呈するもので、胎土に細砂を多く含む。色調は、明赤褐色である。全体に遺存状況が悪いため、剥落や磨滅が認められ、内面のミガキ様の整形を除いては、技法の観察は困難で、ロクロ使用の有無は判断できない。甕は、口縁部資



1・4・6  
 2・9  
 3・5・14  
 7・13  
 8  
 10・11・12・15  
 450-42-II  
 450-41-II  
 448-42-II  
 448-40-II  
 449-40-II  
 S D 51

料に限れば、外反の弱いもので、頸部を境に上はヨコナデ、下部は、縦方向の刷毛目調整の認められるもので、内面にも刷毛目調整の認められるものがある。

#### 〈須恵器〉

須恵器は、第4次調査A区を中心に、第3次調査の水田上面(SJ5)からやまとまで出土している。器種別破片数では、椀8、杯48、蓋11、壺・鉢43を認めた。これらの内で実測の可能な個体は、図示し得た14個体であるが、全形を推測できた資料は2例にすぎない。以下器種毎に、技法の別から分類し説明を行う。

#### 杯形土器(第10図1~9)

平底を有する一群を杯形土器とした。小片となったものが多く、全形を知る事のできるものはない。これらは、切離し技法、再調整の有無によってI~III類に細分し得た。

I類(第10図1~3) へら切り無調整の切離し技法を示すもので、胎土には砂粒が少ない。色調は、いずれも灰白色で、焼成の悪いやや軟質のものがある。底径は、体部の立上がりが不明瞭なため、明確にし得ないが、8cm前後に集中している。

II類(第10図6~9) 回転糸切り無調整の切離し技法を示すもので、胎土に若干の砂粒が認められる。焼成は、I類と同様で、やや軟質のものがある。底径は、大きなもので、10~11cmの値を示すものが3例(第10図6・7・9)で、(第10図8)は8.2cmを測る。(第10図7)は、II類に入れたが、静止糸切り技法を示すものかとも考えられる。

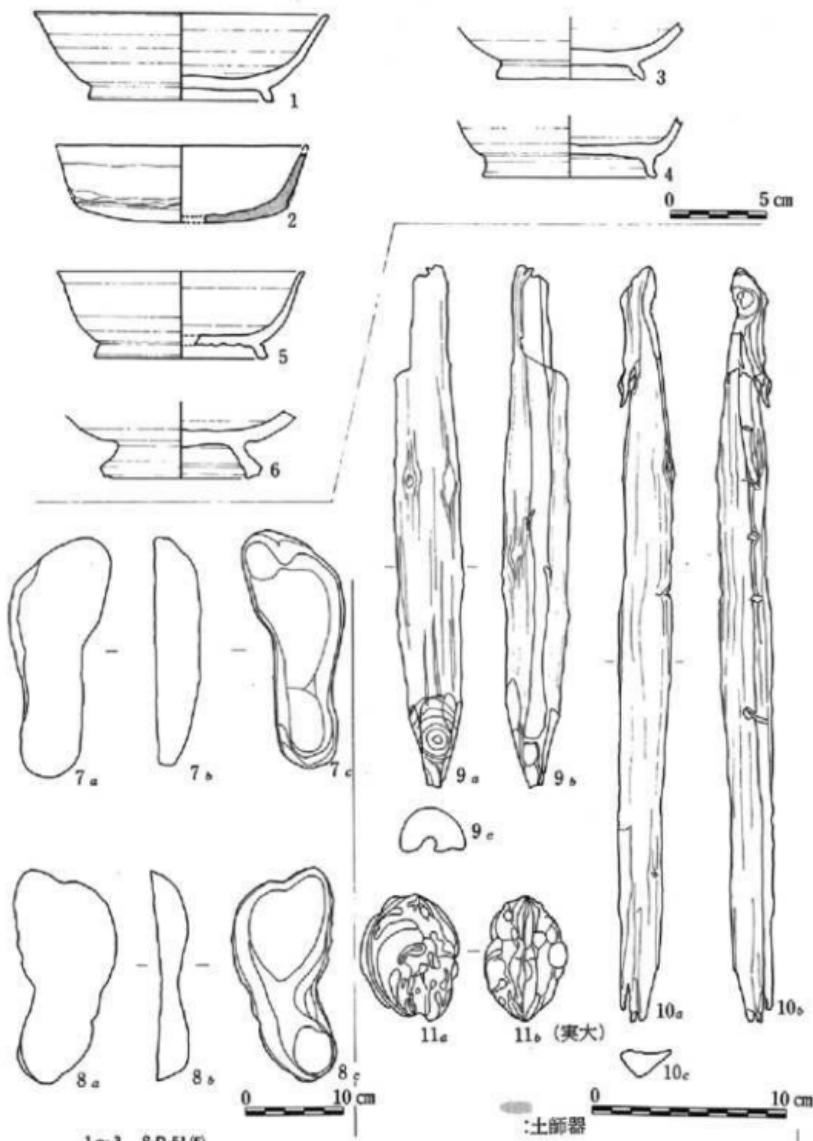
III類(第10図4・5) 底面全域に回転ヘラケズリの再調整を行うもので、図示し得たもの以外1個体の資料がある。焼成は良好で、胎土に若干の砂粒を含み、色調は、暗灰色を呈す。ケズリの方向は、右→左で、ケズリ幅は、0.7cm前後を測る。

#### 椀形土器(第11図1~3・6)(図版10、1~4)

高台を有する一群を椀形土器とした。椀形土器で全形の判断できる資料は、(第11図1~5)の2例のみである。これらは、高台の形状や体部の立上がりなどの別からI類~III類に細別し得た。

I類(第11図1~3) 1は他のものより法量の大きなもので、口径15.1cm、器高4.4cm、高台径9.4cmを測る。胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良く硬質である。色調は、暗灰色を呈す。底部の切離し技法は、不明瞭であるが、回転ヘラ切りと思われる。3は回転糸切りである。

II類(第11図4・5) 5は、口径12.8cm、高台径8.9cm、器高4.5cmを測る。4は、口縁を欠くため、法量を明確にし得ないが、高台径は、9.9cmである。胎土に若干の砂粒を含み、焼成は良く硬質である。色調は、いずれも暗灰色を呈す。底部の切離し技法は、4が回転糸切りで、5は回転ヘラ切りである。また、5の底部中程に、不明瞭な墨書痕を



第11図 遺物(2)

認めることができた。体部の立上りは、1・3に較べて急な一群である。

III類（第11図6） 大きな高台を持ち、強く外側に張出するもので、高台径8.4cmを測る。胎土に若干の砂粒を含み、焼成の良いもので硬質である。色調は、青灰色を呈す。底部の切離しは、高台の整形のため丹念にナデられており、その痕跡を止めていない。

#### 甕・鉢形土器（第10図、10~15）

甕・鉢形土器は、細片になっているものがほとんどで、実測し得る資料はない。甕形土器の体部片と思われるものは、（第10図10・11・13・14）がある。胎土は概して良く、若干の砂粒を含み、焼成は良い。色調は、暗灰色のものが多いが、青黒色を呈すものもある。10、11、13、14は、外面に平行叩目文が施され、内面には、同心文11、13、蓮状文10、が施されている。鉢形土器は、タイプの異なる12・15がある。12は、暗青灰色のやや焼成の悪いもので、口唇に一条の沈線を持つ。15は、場の口縁と同じ様な形態を持つもので、頸部が「く」の字状に外反している。内外面ともにロクロ痕が認められ、外面では、浅い平行叩目文が肩部から下部に認められる。胎土に若干の砂粒を含み、焼成はやや悪く軟質である。色調は、灰白色に近い。以上の他に蓋があるが、小片のため図示し得なかった。

#### 〈加工木〉（第11図9・10）

加工木は、第4次調査A区で二例出土している。第11図9は、自然木の一片に銳利な刃物で7~8の面取りを行って先端を尖らせる杭状のもので、先端以外の加工は認められない。第11図10は、断面が三角になる如く、板状に加工されたもので、その中程の稜に三箇所、刃物により傷を認める。傷は、鋸歯様のものか、他の刃物かは不明であるが、その跡からは、1mm前後の刃厚を持つものと考えられる。時期は、不詳である。

#### 〈種子〉

果実の種子は、第3次調査区S D 2、S J 34の田面から三例出土している。しかし、図示し得たのは、第11図11の桃の種子のみである。11は、幅1.7cm、長さ2.2cmを測る。他は、クリの実かと思われたが定かでない。

#### 〈足跡〉

足跡は、第3次調査区の畦畔（SN26）にクッキリと残されていたもので、細かな砂で埋まっていた。足跡は、水口を挟んで、向き合っており、両者とも東側（低い方）へやや滑った形跡が認められた。第11図7、8は、埋土を取り去った後、石膏形を取ったものの実測図である。7は、親指から踵までの距離が24.6cmあり、踵の幅は、6.2cmを測る。8は、横への滑りが7より大きいため、実体を良く止めていない。親指から踵までの距離は21.2cmあり、踵の幅は5cm前後を測る。両者とも、土踏まずを持つものと考えられる。このほかSN26には、やや不明瞭であるが「ハ」状の足跡が南北方向に並んで認められた。

## VI まとめと考察

### 1 調査の成果と問題点

山辺条里遺構の第1次から第4次に亘る発掘調査では、多くの埋没畦畔が検出され、特に、第3次調査では、一町四方（坪）の北辺に当たる大小の畦畔と水路、坪内割に係わる南北へ延びる畦畔など、貴重な成果が得られている。以下では、調査成果を概述し、合せて条里制研究との関連からいくつか問題点に触れて見たい。

#### 埋没畦畔の分類

第3次調査区域では、地表下50cm～70cmに、ほぼ正東西方向に走る二条平行の畦畔を110mに亘って検出し得た。平行する畦畔の南側に位置する畦畔の幅員は、平均すれば50cm前後で、北側に位置する畦畔の幅員が平均1m前後であるのに較べれば、約半分の幅員である。また、上述の東西方向に延る畦畔から直角に南側に延びる畦畔は、幅員が50cm未満で、坪内の水田を画す畦畔と考えられる事ができる。以上で認め得た畦畔は、その幅員から、a～cの三種に類別できる。a、幅員が1m前後のもの。b、幅員が50cm前後のもの。c、幅員が50cm未満のもの。以上の三種である。第1次・第2次調査では、cの畦畔が多くセクションで観察され、第4次調査では、a・bの畦畔が部分的に検出された。第3次調査では、上述の通りである。しかし、坪の四隅の調査が充分でなく、そこでの畦畔、水路の状況を明確に把握し得ていない。調査区の東端に位置するH区での遺構検出状況は、現地形と現畦畔の状況から、坪の北東隅に当たると考えられるが、調査範囲が小さく、その決めて欠ける。北西隅については、A区のさらに西側部分と推測される。従って、坪一辺（一町）の長さを確定し得ていない。現水田での一町に該当する畦畔長は、120m前後の数値が計測され、古代の一町（109m）に較べて10m強長い事になり、問題が残る。

#### 坪内割について

一町四方（坪）内を区分する畦畔は、第3次調査のB区、C区で良好に検出されている。これらの畦畔と畦畔の距離をみてみると、SN26とSN27の間で9.5m、SN27とSN28の間で9m、SN28とSN29の間で10.7mを測り、必ずしも一定でない事が知られる。しかしながら、坪内の水田が、東西幅10m前後の南北に細長いものである事を推測させる。には充分であり、所謂長地式型の水田であったと考え事ができる。坪内中央部における畦畔の状況については、調査が充分でなく明かにし得ていない。

#### 水口と水路

第3次調査では、大小の水口が14箇所で検出されている。これら水口は、その位置と幅

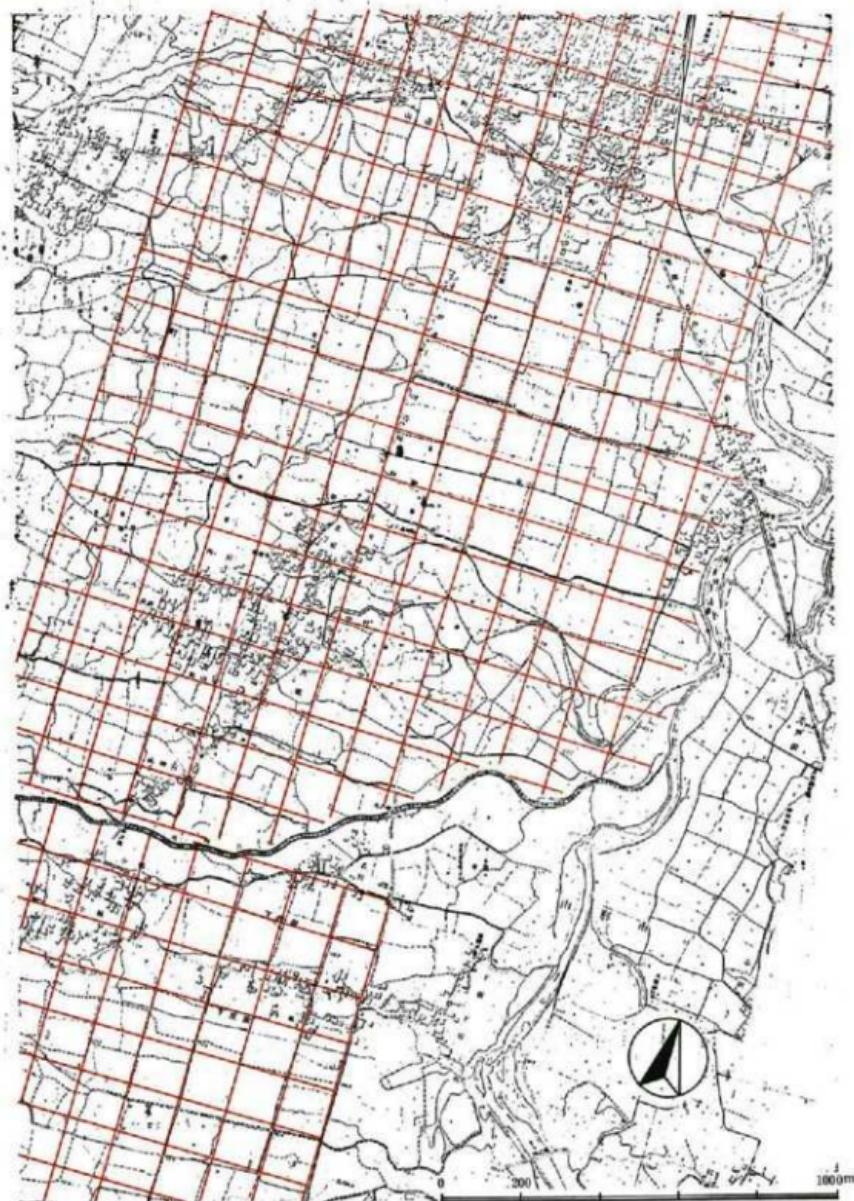
員から大きく三種に類別できる。a、坪内割の畦畔に位置し、幅員 20cm 前後のものが多い。これらは、坪内水田の用・排水に用いられたものと考えられる事ができる。(ED 6~8)、b、坪北辺を区画する畦畔に位置するもので、幅員 40cm 前後のものが多い。これらは、坪内水田の排水を水路に導くためのものと考えられる。(ED 9・10・45) C、農道と考えられる幅員 1m 前後の畦畔を切るもので、水口の幅員は 75cm 前後を測る。(ED 11) 等、また、坪四隅の調査が充分行われ、その実態が明確にされれば、用排水路に係わる取水口、排水口、その他の施設に関する知見がさらに増大し、上記以外の類型が認められる。

#### 埋没畦畔と現畦畔

現水田は、真北方向を基準に、一辺が 120m 前後の規模で、ほぼ方形に区画されている事については先にも記した。以下、調査によって検出された埋没畦畔と現畦畔の主として位置、方位など、その相関を検討したい。位置関係について見ると、第 3 次調査の A 区、B 区、C 区では、現畦畔の直下、あるいは、若干外れて埋没畦畔が検出されている。D 区から北側では、現畦畔はやや南に折れ、調査区内で埋没畦畔と重なり合う事はない。この部分での埋没畦畔は、A 区・B 区・C 区から続いてほぼ真東に向って延び、調査区東端で幾分北へ偏する事が判る。この点では、埋没畦畔の方がより古代の企画性ある条里畦畔に近いもの、あるいは条里畦畔そのものと考え事ができる。以上の事から、坪を画す現畦畔は、後世の部分的改変を受けるものの「古代からの伝世」と考えてよいと思われる。次に坪内の埋没畦畔と現畦畔の関係をみてみると、その相関は弱く、変貌度が強いと考えられる。この事は、土地所有の変遷とも関連し、割合に高低差の少ない坪内の事を思えば、容易に納得できる状況と言える。しかし、地形の制約上現在も長地式型を基本とすることに変化ない。

#### 埋没畦畔の年代と出土々器

埋没畦畔の年代を推定し得る資料に、第 3 次調査、第 4 次調査で出土した土師器、須恵器がある。土師器では、磨滅の著しい細片が多く、全形の判るものは杯(第 11 図 2)一点のみである。これは、ゆるやかな丸底を呈するもので、ロクロ使用の有無は磨滅のため判別は困難であるが、恐らく、不使用と思われる。なお、内面は黒色化処理がなされていない。以上の事から、この杯は、所謂ロクロ使用杯以前のものかと考えられる。須恵器では、杯、椀、甕、鉢の各種の土器があるが、全形の判るものは、杯、椀類に限られる。杯では、制作技法の違いから I ~ III 類に細別でき、I 類は、底径の大きなヘラ切り無調整の杯、II 類は、底径の大きな回転糸切り無調整の杯、III 類は、底面全域に回転ヘラケズリの再調整



第12図 推定条里跡

を行う杯である。これらⅠ～Ⅲ類の杯は、底径の大きい点や、回転ヘラケズリの再調等に特徴が見られる。椀では、体部の立上りや、高台の形状からⅠ～Ⅲ類に細別でき、Ⅰ類は、他に較べ法量の大きな椀、Ⅱ類は、体部の立上りの急な椀、Ⅲ類は、底径が小さく、大き目の高台が外側へ張り出す椀である。以上のⅠ～Ⅲ類は、それぞれ、回転糸切り、ヘラ切り、および切離し技法の不明な一群が認められる。これら須恵器の杯、椀の年代は、編年の確立されていない当地にあっては明確にし得ないが、概ね8世紀～9世紀代の年代が想定でき、杯Ⅲ類の特徴だけを見れば、8世紀代も前半に位置づける事ができるかもしれない。次に、これら出土々器の層位について検討したい。第3次調査では、IV層下面からV層の上面にかけて土器が出土している。これらの土器は、旧水田面に食い込む若干のものを除けば、IV層の砂礫と共に流れ込んだもので、土器の磨滅が著しい。従って、IV層によって埋没した畦畔は、これらの土器より古い時期かあるいは同時代のものと考える事ができる。第4次調査では、II層下部～III層直上にかけて土器が出土し、検出し得た埋没畦畔と水田面は、III層によって形成されたものである。土器がまとまって出土した溝(SD 51)もIII層を掘り込んだもので、時期的には埋没畦畔と同時代のものかやや新しい時期のものと考えられる。さらに、第4次調査A地区での土層推積状況を見ると、III層下に砂礫層(IV層)、粘土層(V層)と続き、第3次調査区と期本的には変わる所のない事が知られる。この事は逆に、第3次調査区でもIII層面に一枚の旧水田があった事を予想させ、事実土層のセクションや(第3図)、III層が有機質を多く含む粘質土壤である事から見ればその可能性が強い。以上の事から、第4次調査で検出された埋没畦畔は、第3次調査で検出された埋没畦畔より一時期新しい時期の所産と考えられ、出土々器の良好な第4次調査の資料を検討する限りでは、奈良時代を中心とする8世紀～9世紀代の年代が想定される。従って第3次調査における埋没畦畔と水田は、時期的に第4次調査の埋没畦畔より新しくなる事はないと言える。

#### 条里遺構の範囲

調査地区一帯に認められる現条里様水田の範囲は、柏倉亮吉氏によって東西12町、南北20町と推定されている。第1次から第4次までの調査は、これら水田の中央部分に当り、当然の事ながら、その範囲を確定し得るものではない。しかし、調査結果から、埋没畦畔の方位は、ほぼ正南北を基準としている事が判り、現畦畔と埋没畦畔の検討からは、坪を画す畦畔に相関が強く認められている。こうした事から、幾分飛躍の感があるものの、山辺条里遺構の範囲を推定するために、真北を基準とする一辺120mの方眼を地図上に落したのが第12図である。これを検討すると、方眼と120m四方の水田はほぼ合致し、南限は後明沢川附近、東限は三河尻集落附近、西限は、出羽丘陵傾斜変換線附近、南限は町並に

掛るため明確でない。従って、東西は12町と推定され、南北は後明沢川から数えて16町前後までは推定でき、少なくとも192坪以上（5～6里）の規模を持つと考えられる。一方、後明沢川を挟んで直ぐ南側に広がる大曾根条里遺構とは同一企画によるとは思われない。

## 2 山形盆地における奈良時代の土器について

山形盆地における奈良・平安時代の土器は、必ずしも明確にされておらず、近年に至って漸くその輪郭が龍氣ながら把握されるようになったと言つても過言ではない。従来の当該期を含む土師器、須恵器の研究には、柏倉亮吉氏・小野忍氏、加藤稔氏等の論考があり、近年では、古墳文化の展開に視点を置いた加藤稔氏の研究や、山形市立第三小学校敷地内（註1）（註2）（註3）遺跡の探査資料を基にした小野忍氏の論考がある。以下では、主に奈良時代（8世紀～9世紀初頭）に係わると考えられる土器について、上述諸先の論考および、県文化課が行った調査遺跡の下反田遺跡・西高敷地内遺跡・山辺条里遺跡等から、その概略を述べてみたい。

### 1 下反田遺跡西区の落込遺構（S×2）出土の土器

S X 2からは、土師器、須恵器がやまとまって出土している。土師器では、a：ロクロ不使用のゆるい丸底を呈する内黒杯の他、f：口縁が「く」の字状に外反し、頸部に段ないしづ線を認める壺（内外面刷毛目調整）等がある。須恵器では、再調整の認められる杯に、以下のA、B 2類型がある。A：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（底部外周、体部下半）、B：回転糸切り→回転ヘラケズリ（底部全周）。再調整のないものでは、D：ヘラ切り無調整の杯がある。他に、F：高台を持つヘラ切りの椀や、H：肩部に回転ヘラケズリのある蓋（ヘラ切り？）、X：外面平行叩目、内面に青海波文または、押圧痕のある壺、Y：大形の長頸壺、Z：大形の短頸壺がある。

### 2 西高敷地内遺跡第141号住居跡（ST141）出土の土器

ST141からは、上述の土師器a、f、の他、c：体部外面中央に一条の浅い凹線でわずかに段を形成する丸底の非内黒杯が出土している。須恵器では、Xの壺類の他、E：底径のやや大き目な静止糸切り無調整の杯がある。これらは、明確な住居跡から出土したセットとして捉える事のできる唯一の例である。これら以外に、細片ながらeとはやや器形の異なるg：頸部に明瞭な段の認められない壺がある。

### 3 山形市立第三小学校敷地内出土の土器

土師器では、d、fの他、b：器形はcと同様で、内黒のものがある。他に、d：体部外面はヘラケズリ調整、下半に刷毛目調整を認め、内面を黒色化処理する高杯がある。須

惠器では、上述のAの他、G：高台を持つ回転糸切りを認める椀があり、他に、肩部に回転ヘラケズリのある蓋Hや、短頸壺Zがある。

#### 4 山辺条里遺跡第51号溝跡（SD51）出土の土器

S D 51 から出土した土器は、土師器では、a、f の他、e：ロクロを用いず、体部中央の凹線、段の認められない非内黒の丸底風杯がある。須恵器では、Bと思われる底部全域を回転ヘラケズリする杯の他、F、Gの椀があり、さらに、X類の壺や鉢がある。

#### 5、二位田遺跡7号住居跡（S T 7）出土の土器

S T 7 から出土した土器では、その全体について不明な部分もあるが、須恵器に、C：回転糸切り→手持ちヘラケズリ（底面全域）の認められる杯があり、蓋では、Hに類するI：天井部切離し面全域を回転ヘラケズリするものがある。

以上の五遺跡で認められる土器の特徴をみてみると、土師器類では、所謂国分寺下層式（註11）（対馬式も含む）の特徴に類似し、杯では、ロクロ不使用のゆるい丸底を呈する内黒杯（a）（註12）と非内黒の杯（e）、体部外面中央に段（凹線）を持つ内黒杯（b）と非内黒杯（C）があり、他に、内黒の高杯（d）等がある。須恵器の杯、類では、回転糸切りの後手持ちヘラケズリを底部外周に行う（A）と、回転糸切りの後回転ヘラケズリを底部外周に行う（B）および、回転糸切りの後手持ちヘラケズリを底面全域に行う（C）が各々認められる。以上のA～Cの切離し後再調整を行うもの以外では、ヘラ切り無調整の杯（D）と、静止糸切りで無調整の杯（E）があり、これらは以上で述べた如く、各々の遺構で土師器各種、杯以外の須恵器と共に伴している。また、明確な共伴が認められていないものの、前述須恵器杯と同形態（底径が大きく器高の低い）で、回転糸切り無調整の切離し技法を示す杯があり、ほぼ同時期かやや後出する時期の所産かと考えられる。これは、回転糸切り無調整杯の初現と考えられるもので、注目したい。

次に、山形盆地周縁山麓に位置する当該期の須恵器を生産する窯跡について若干検討したい。再調整を認めることが出来る杯類を出土する窯跡は、上山市葉山第3号窯跡、上山市三千刈古窯跡群等で認められている。葉山第3号窯跡の杯は、「口径は勿論、底径も器高（註13）に較べて大きい。底部下面には糸切り痕をわずかに認める。また底部周縁は、約1cm幅にわたって箠削りが行われている。この削りは一気に行ったものではなく、數度繰返して一周している。」とされ、回転糸切りの手持ちヘラケズリ調整を行いうものと判断できる。これは、上述各遺跡出土々器分類の須恵器杯Aに当り、下反田遺跡、山形市立第三小学校敷地内遺跡等で出土したものに近似している。今の所、こうした調整を認める杯を焼成した窯跡は、山形盆地では、葉山第3号窯跡の内容が明確にされているだけであり、今後とも追求される要がある。これら杯類の時期は、当地にあっては明確にし得ないが、多賀城周辺における

る成果に照せば、Aは8類、Bは7類、Dは6-a類、C、Dは該当例がない。時期的に  
(註15)は、8世紀中葉を中心に、9世紀初頭代に掛ると推定されている。しかし、山形盆地における窯跡の実態は明確にされておらず、杯以外の組成や年代等早急に確立されねばならない。

#### 参考引用文献註

- (註1) 柏倉亮吉他「土器集成本編4」東京考古学会編
- (註2) 小野 忍「山形県古代窯業遺跡の研究」「平野山古窯跡群—山形県における古代窯業遺跡の研究一」所収 昭和45年
- (註3) 加藤 稔「山形盆地における土師器の編年」「山形市史別巻I 窯遺跡」所収 昭和41年
- (註4) 加藤 稔「最上川流域における古墳文化の展開」「最上川流域の歴史と文化」所収工藤定雄教授還暦記念会編 昭和48年
- (註5) 小野 忍「山形市立第三小学校敷地遺跡出土の土器」山形考古第3巻第1号 昭和52年
- (註6) 佐藤慎雄他「大曾根条里遺構」「山形県埋蔵調査報告書第6集」所収昭和51年
- (註7) 佐藤庄一他「西高森地内遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 昭和54年
- (註8) 註5に同じ
- (註9) 本報告書「V出土遺物」参照
- (註10) 佐藤慎雄・佐藤庄一他「二位田遺跡」「山形県埋蔵文化財調査報告書」所収 昭和51年
- (註11) 氏家和典「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって—奈良・平安期土師器の諸問題ー」「山形県の考古と歴史」所収 昭和44年
- (註12) 小井川和夫・高橋守克「宮城県対馬遺跡出土の土器」「宮城史学第5号」昭和52年
- (註13) 註2に同じ
- (註14) 註2に同じ
- (註15) 岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」「研究紀要」I 昭和50年

図 版



山辺条里造機全景

(山形西部土地改良区提供)



調査区遠景（2次）



兎塀風景（2次）



C トレンチ壁面セクション（2次）



C トレンチ壁面セクション（2次）



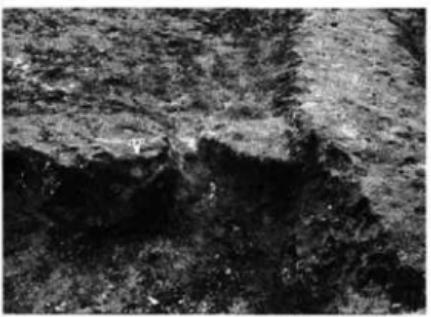
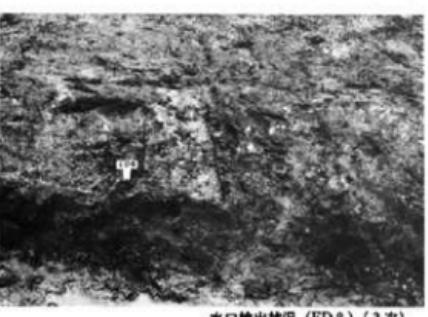
E トレンチ壁面セクション（2次）



発掘風景（3次）

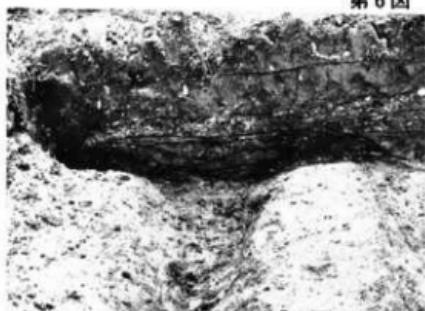


検出暗跡（3次）

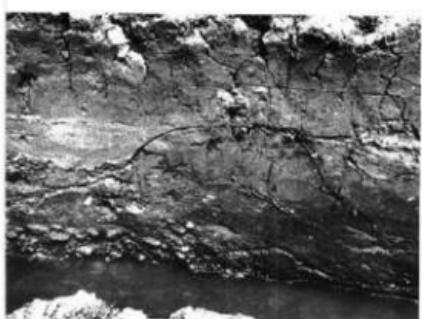




土層セクション（3次）



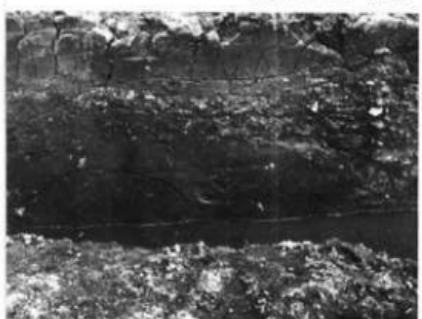
畦畔と土層の堆積（3次）



畦畔セクション（3次）



畦畔セクション（3次）



畦畔セクション（3次）



大溝跡セクション（3次）



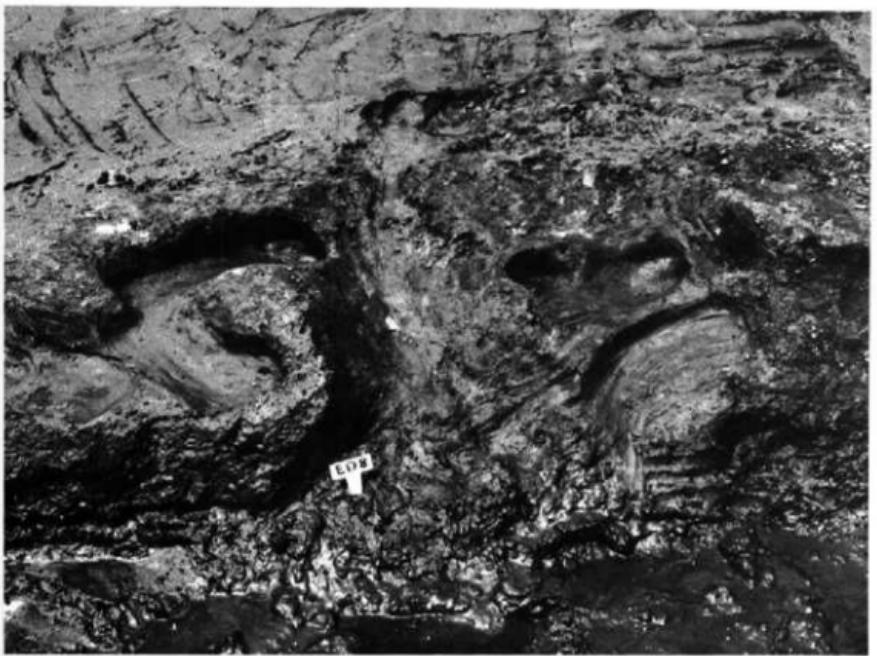
遺物出土状況（3次）



遺物出土状況（3次）



水口と足跡全景(3次)



足跡近景(3次)



調査前進景(4次)



B区造構全景(4次)



A区発掘風景（4次）



A区造構全景（4次）



A区検出畦畔と水路（4次）



A区土層セクション（4次）



A区溝路と遺物出土状況（4次）



遺物出土状況（4次）



A区遺物出土状況（4次）



遺物出土状況（4次）

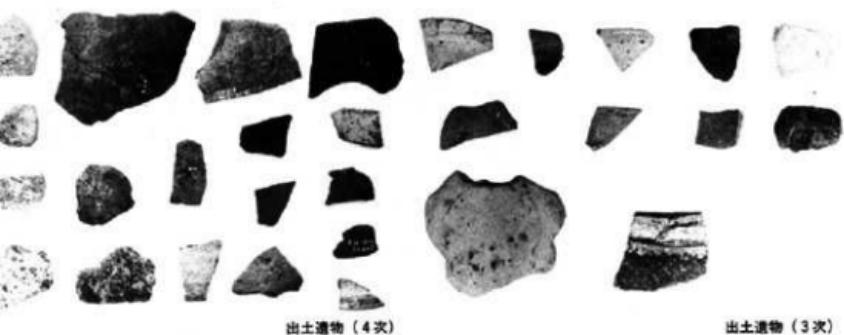


出土遺物 (SD51)(4次)



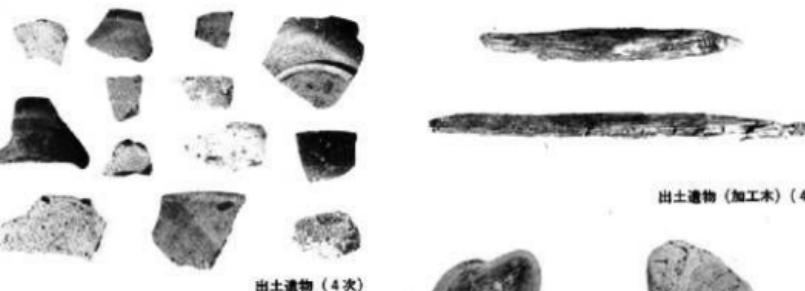
出土地物 (4次)

出土地物 (4次)



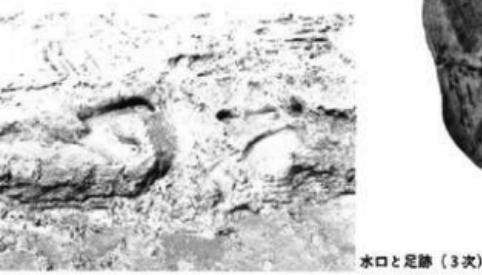
出土地物 (4次)

出土地物 (3次)



出土地物 (4次)

出土地物 (加工木) (4次)



水口と足跡 (3次)



足跡の石膏形 (3次)

---

山形県埋蔵文化財調査報告書第22集

やま のべ じよう り い こう  
**山辺条里遺構**

**発掘調査報告書**

昭和54年3月28日 印刷

昭和54年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社 大風印刷

山形市あごや町1-4-3 TEL31-5975#0

---